

【研究テーマ】

霧多布湿原において在来の植物とマルハナバチに対する外来種セイヨウオオマルハナバチの影響評価と保護対策に関する研究

【研究の目的】

日本では 1991 年からハウス栽培用農作物の授粉昆虫として、外来種セイヨウオオマルハナバチが輸入されている。しかし一部の個体がハウスから逃げ出し、帰化していることが報告されている。本種は繁殖力が高く、在来マルハナバチや在来の生態系に影響を与えることが危惧されたため、2006 年に特定外来生物に指定され、現在は利用が制限されている。しかし、北海道では既に多くの個体が帰化していたため、減少どころか年々分布範囲を拡大し続けており、北海道各地の在来生態系に大きな影響を及ぼしている(図 1)。

以前から霧多布湿原や岬とその周辺地域で行っていた調査では、2010 年 6 月に当地において初めてセイヨウオオマルハナバチの侵入が確認された(井之口ほか、2011)。過去の事例では、侵入が確認されてから数年以内に本種が在来マルハナバチを駆逐し、優占種となることが報告されており、霧多布湿原でも同様の状況になることが予想される。霧多布湿原では、希少な在来植物とその花粉媒介者である在来マルハナバチが送粉共生関係にあり、固有の生態系を形成していると考えられる。この希少な送粉生態系を保全するためには、湿原の中心部及びその周辺部でのモニタリング調査を行い、早急に本種の侵入に対する防除対策を講じる必要がある。

本研究では霧多布湿原とその周辺地域における在来マルハナバチとセイヨウオオマルハナバチの侵入状況を明らかにすることを目的とした。それによって、霧多布湿原のマルハナバチ相におけるセイヨウオオマルハナバチの侵入状況や分布密度を把握した。

【調査方法】

・霧多布湿原のマルハナバチ相の観察

霧多布湿原におけるマルハナバチ類の生息状況を調べるために、越冬したマルハナバチの女王蜂が営巣を始める 6 月と、マルハナバチの巣が発達し、働き蜂やオ

